

タイトル	イン・チェンを読む(2): 『恩知らず』における食のイメージ
著者	一條, 由紀; ICHIJO, Yuki
引用	北海学園大学学園論集(173・174): 19-37
発行日	2017-12-25

## イン・チェンを読む (2)

——『恩知らず』における食のイメージ——

### 一 條 由 紀

1995年に発表されたイン・チェンの小説第3作目『恩知らず *L'Ingratitude*』は、いくつもの文学賞を獲得するなどして高く評価された、彼女の代表作と呼べる作品である。2002年には作者自身によって中国語に翻訳されている<sup>1</sup>。

小説は35の短い章から成る。舞台は中国の都市部（作者の出身地である上海?）、おそらく1986年<sup>2</sup>である。イエンズという名の死んだ娘が、自分の葬儀や、残された家族や友人知人たちの様子を語る章と、自身の死に至る経緯を振り返る章とで構成されている。彼女は抑圧的な母親に反抗し、その軛から逃れるために自殺を選ぼうとするが、計画を実行できないまま交通事故で亡くなる。タイトルの『恩知らず』とは、親の期待に背き、反抗することを指すだけでなく、親より先に死ぬことが孝にもとる行いであることを示している。イン・チェン自身も、この小説は「親子関係のありふれた残酷性やルーツの無益な側面」（Ying, 2004, p. 25）を取り上げたのだと述べている。したがって『恩知らず』は、子の親に対する反抗、伝統的価値観との対立、あるいは世代間ギャップを描いた小説だと言えるが、主人公は移住者をあらし、母親が表象する出自や母国を離れようとしているのだと解釈することもできる。実際、早くも1章で、死んだ娘は自分が「流浪 *exil*」の状態にあると述べており、彼女がふたつの世界に引き裂かれた者であることが強調されている。また、イン・チェンは自分の移住を「自殺行為」（Ying, 2004, p. 22）と呼んでいる。イン・チェンの初期3作は、主人公が皆中国人であり、彼らが何らかの「流浪」を体験する小説となっているが、『不動 *Immuable*』（1998）から『岸辺は遠くに *La rive est loin*』（2013）のシリーズでは、場所や時間の指示が消え、名もなく、年齢も国籍もわからない主人公語り手のモノログを通して、より内的な「流浪」を書くスタイルへと変化する。最新作『傷 *Blessures*』（2016）は3人称の語りになっているが、やはり場所、時間、主人公の名などは明示されない<sup>3</sup>。『恩知ら

<sup>1</sup> 应晨（2002）《再见，妈妈》，浙江文艺出版社。

<sup>2</sup> 毛沢東の死について言及があり（15章）、主人公イエンズが丑年の25歳とされていることから（18章および21章）、ポレは彼女の死の年が1986年だと計算している（Porret, 2007, p. 2）。そうするとイエンズは1961年生まれであり、作者イン・チェンと同年の生まれということになる。

<sup>3</sup> とはいえ、主人公が中国で医療活動を行ったカナダ人医師ノーマン・ベチューンをモデルにしていることは明らかである。だが、イン・チェンは歴史的背景をぼかし、物語を抽象化することにより、普遍的な流浪の主題を提示しようとしている。なお、イン・チェンは『傷』以前にも度々ベチューンに言及しており、『恩知らず』でも3章で彼の死が話題になる。

ず』は、この変化のターニングポイントに位置づけられ、前2作よりテキストの抽象性が高まる一方で、『不動』以降のシリーズの主人公-語り手が転生や変身をくりかえす者を予告するかのようになり、結末で主人公は転生する。また、『傷』の主人公もイエンズと同様、死後も世界を彷徨う霊として登場する。

以上のように、『恩知らず』は多角的な読みが可能な作品であるが、本稿では特に、テキストで頻繁にくりかえされる食のイメージを分析し、特定の時代・場所の母娘の物語がどのように抽象化され、母なるものとの関係性という普遍的な主題を提示し得ているのかを明らかにしたい。まず、主人公イエンズを死に至らしめることになった母娘の関係を分析し、次に食べる／食べられることをめぐるイエンズの両義的態度を明らかにし、最後に食と肉体性の問題を論じ、イエンズの再生について考察する。イン・チェンのテキストでは、ある語やイメージが複数の意味を持つだけでなく、それらが別のテキストでもくりかえし使用されることによって、新たな解釈を喚起し、関連する主題を発展させてゆく。『恩知らず』における食のイメージを検討することは、さらに抽象的・詩的に変化する『不動』以降の作品を分析する際にも有効な視座を提示することになるだろう。

## 1. 母と娘

『恩知らず』は、小説全体がある意味で娘が母に向けて愛憎を語るモノローグになっており、様々な人間関係が語られるなかで、母娘の関係は特権化されている。その関係は、食べる／食べられること、姿勢の優位性をめぐる争い、母の分身としての恋人と娘との戦いによって表象される。

### 1-1. 娘を食べる母

イエンズの母は非常に抑圧的な人物である。サン＝マルタンは、『恩知らず』で描かれているのは「虐待 abuse」だと明言している (Saint-Martin, 2001)。母は娘が自分に服従するのは当然であり、子の人生は親が決めるものだと考えている。娘の将来に母の、あるいは家族の将来、持続がかかっているからだ。そのため、娘が母の希望通りの結婚をすることが特に重要である。イエンズは大学を卒業し、働いている一人前の人間であるにも関わらず、給料をすべて母に渡さなければならない。母によれば、それは持参金を貯めるためであり、日常的に必要な金は娘に与えているのだから問題ない。また、イエンズは自分で結婚相手を選ぶこともできない。彼女の初めての恋人ホンチイは、母に気に入られなかったため、去って行った。母が選んだ相手であるチェンは娘よりも母に気を使い、機嫌を取ろうとする。イエンズは自由に友人と外出することもできず、食事に出かけようとするれば、母が友人たちに片っ端から連絡して誰と一しょにいるのかつきとめようとする。子は親に、若者は年長者に従わなければならない。イエンズの母は、まさに伝統的儒教的価値観を体現する人物である。

このように娘を支配しようとする母は、娘を食べてしまう母として表象される。

私は時々、母さんが私を生きたまま飲みこんでしまいたいと思っているのではないかという気がした。自分の体のなかで私をつくりなおし、自分好みの容貌、性格、知性を持った者として私を生まれ変わらせたいと思っているのではないかという気がした。(I, p. 20)<sup>4</sup>

母の腹は子を食べてしまう一方で子を宿す場である。そのイメージにおいて、母の胃袋と子宮は同じものとなる。銭湯で母の腹の帝王切開の跡を見るイェンズは、その傷が口となって「おまえは私のものだ」と叫ぶ気がする。腹の傷は娘を食べようとする口に変貌する。

母はまた、娘を獲物として捕らえる獐猛な肉食動物のようでもある。親戚たちが集まる会食で、母は娘の手をしっかりとつかんだまま客たちの挨拶を受ける。その「硬い爪が自分の肌を切り裂き、肉に食い込むのではないか」(I, p. 110)と恐れる娘は、もっと痛くされないように、じっとおとなしくしているしかない。さらに母は蜘蛛にも喩えられる。家族には厳しくすべきだと考える彼女の愛は「支配者の愛」であり、「自分の体から出た物質、血と唾液と汗と涙のまじったもので、テリトリーを支配する蜘蛛の愛」(I, p. 52)である。娘はこの蜘蛛の巣にかかる獲物だ。

イェンズは大人になっても、母にとっては腹のなかの赤子のままである。母は自分の腹に娘の手をあて「おまえはここにいるんだよ」(I, p. 110)と現在形で言う。母にとって娘はいつまでも自分の「肉体の一部」であり、したがって自分の思い通りにできるはずのものである。

時々、むしゃくしゃしすぎてかっとなると、私は小声で訴えたものだ。私はあなたに何の恩も感じないよ、母さん、いつも私をあなたに似せようとする野心を持っている母さん、部分的に私の体のなかで生きている母さん、私はそんなことを許した覚えはないのに、そして、私の運命をほとんど決めてしまう母さん。(I, pp. 22-23)

母にとって、娘は自分の一部であるだけでなく、自分に似るべきもの、さらには同じになるべきものだ。つまり自分の「複製」である。母は娘を自分の「できる限り正確な複製」(I, p. 111)になるべきものとみなし、肉体が減びた後も娘のなかに生きながらえようとする。しかし、娘は母とは異なるものとして、自立した存在として生きたいと願う。だから、母の専制から逃れようとするイェンズは自分を破壊しなければならないと考える。「母の子供」を殺し、「私」を分離しようとするのだ。

私は母の子供として生きてきた。私はほかのものとして死ななければならなかった。私は自分のやり方で生涯を終えるだろう。私が何ものでもなくなる時、私は私になるだろう。(I, p. 23)

<sup>4</sup> 『恩知らず』の引用箇所にはIの後にページ数を付す。

こうしてイエンズは、母とは別の存在になるために自殺を考えるようになる。母の一部であり、その似姿である肉体を減らすことによって、そこから、今はまだ「私」に固有のものであるはずの精神を手遅れにならないうちに分離しようとする。しかし、イエンズ自身も気づいているように、その時彼女は「私になる」よりも「何ものでもなくなる」だろう。それは最初から不可能な試みなのだ。

## 1-2. 姿勢をめぐる戦い

娘を自分の肉体の一部と考える母は、娘の身体の矯正を通して彼女を支配し、その精神を躰けようとする。どういう時にどんな態度や姿勢を取ればよいのか、母は娘に教えようとする。親の前で子が取るべき姿勢は、身をかがめ、小さくなることだ。そうして謙譲の意を示さなければならぬ。

たとえば、娘よ、おまえは少し前から両親の前で態度が大きすぎるんじゃないかと思っている。だから、もっと小さくなりなさい、目を伏せて、もっと、もっと…そう、そんなふうに。  
(I, p. 137)

娘を食べ、いつまでも腹のなかに収めておきたい母にとって、娘はずっと小さくあるべきだ。「態度が大きすぎる *se gonfler trop*」は、一義的には「ふくらみすぎ」ということである。母は娘が大きくなることを望まず、いつも自分より小さく、低い位置にあることを望む。しかし娘はそのような姿勢を望まない。逆に、母が目を伏せ、身をかがめ、自分より小さくなることを願う。イエンズが自殺というショッキングな死を望むのは、ただ母から分離された存在になりたいがためだけではなく、その衝撃によって母を打ちのめし、平伏させたいからである。イエンズは自分が死ぬ時に「母さんがふるえるのを感じ」、「くずおれる母のイメージ」を見ることを願う (I, p. 61)。娘は地位の転倒を望み、母が小さく低くあることを好ましく思う。常に背筋を伸ばし、厳しい態度の母が、娘が病気の時だけは身をかがめ、憐れみの情を見せて看病してくれたことが、イエンズにとっては数少ない母とのよい思い出 (I, p. 35)。

自殺とは別の方法ですでに、イエンズは母を打ちのめすことに成功している。恋人でもない男——母公認のチュンとは別の男——ビィと関係を持ち、深夜に帰宅したイエンズは両親と口論になるが、そこで母が見せる態度は、まさに娘が望んだ通りのものである。母は娘から目をそらし、その体は揺れ、床にへたりこみ、すすり泣く (I, pp. 98-99)。翌朝、母の顔は腫れ、その背中は曲がったままだ (I, p. 115)。また、この争いで娘は父に対しても優位な姿勢を保つ。父に叱られ、殴られても、彼女は「まっすぐ立ったままでいようとした。父の方を執拗に見つめた。しかし、揺れる影しか見えなかった」 (I, p. 97)。

この後、彼女は家を出ることになるが、口論の顛末を語る22章では、両親を指す語として「父

さん」「母さん」のほかに「この男」「この女」という語も使われており、イエンズが両親から心理的距離を置きつつあることが仄めかされている。両親に対して優位な姿勢を獲得することで、彼女は分離を成し遂げようとするのである。

### 1-3. 母の分身チュン

イエンズがビィと寝たのは母に打撃を与えるためである。母は娘により結婚をさせるため、給料をすべて自分に預けさせ、身体を処女のままだにしておこうとしていた。母は娘の手を「それが自分の財布であるかのように」(I, p. 109) つかむが、ヤン・ウエンも指摘するように、財布は娘の身体の交換価値を象徴している (Yang, 2015, p. 69)。イエンズは恋人でもない男と関係を持つことによって、母が体現する伝統的結婚観に挑戦し、自分の身体を価値のないものに貶めようとする。彼女を行為に突き動かしたのはビィへの欲望以上に母への反抗心である。だからこそ、彼女はビィに身をゆだねた時も「母のことしか考えていなかった」(I, p. 99)。

一方、母が家族の持続と引き換えに娘を渡そうとした相手チュンは、イエンズの知らないところで母によって婿候補として選ばれた男である。家に招待された日、チュンは恋人の両親に長寿を願う朝鮮人参を贈り、食事中の会話では周到に彼女の母にへりくだる態度を見せる。母は大変満足するが、その気持ちを表には出さない。チュンもまた、表立って何か約束を求めるようなことはしない。彼は伝統的慣習に順応している人物、「平凡な夫」(I, p. 56) となるには申し分ない男性だ。

母と価値観を共有するチュンは母の化身としてイエンズに対峙する。彼も母と同様にイエンズを食べてしまおうとする存在だ。彼が結婚の許しを得るために求めるイエンズの手は「食欲をそそる」(I, p. 66) 手である。彼女は食べられるための獲物なのだ。

チュンも私に [母と] 同じようなことを言っていた。気持ちがこの上なく高まり、体がすっかり熱く感じられる時、彼はよくささやいたものだ。きみを愛しすぎて丸ごと飲みこんでまいたくなる。あるいは、ぼくはきみの大きな狼だ、きみはぼくの小さなウサギだ、決して逃げようなんて思わないで、きみはぼくのものだ、いいかい、きみはぼくのものだ、ぼくだけの…。(I, p. 110)

チュンのこうした考えを見抜く母は、彼に限らず娘に言い寄る男たちは皆自分の競争相手であることをよく理解している。彼らは「泥棒」であり、「娘を食べる者たち」なのだ (I, p. 110-111)<sup>5</sup>。恋人たちは、親つまり「自分の出自」(I, p. 44) を忘れさせることによって、娘を恩知らずに変えてしまう。

<sup>5</sup> 「食べる者 mangeur」は2005年に発表されるイン・チェンの小説のタイトルになる。そこでも親子——今度は父娘——の関係が問題になる。

イエンズは睡眠薬自殺を計画していたが、彼女が行きつけのレストランでそのタイミングを計っているとチュンが現れ、じゃまされる。窓の光を遮る不穏な影として出現したチュンは、彼女の母に比べられる。「[イエンズ] についてきて、ガラス越しに飲みこもうとする」影は、「愛情深く抑圧的な様子」によって「母さんを思わせた」(I, p. 143)。母もチュンも愛を口実に支配しようとする。彼らの愛は、その対象を食べ、同化してしまうもの、対象の個別性を消してしまうものとして表象される。

レストランに入って来たチュンはイエンズを安心させるかのように微笑むが、それは彼が母の「共犯者」であることを隠す微笑みだと娘は気づく。イエンズは逃げようとして外に出るが、チュンは追いかけてくる。自らをウサギを狙う狼に喩えていた彼は、今や「狩猟者」のように追ってくる。

額の血管が膨らんだ彼は、執拗な狩猟者のようなものを思わせた。彼は私の後を母さんのように決然と走ってきた。母さんが彼を寄越したのではないか、あるいは私を追ってくるのは母さんの化身そのものなのではないかと思った。(I, p. 145)

チュンは「その娘をつかまえて!」と通行人に呼びかけながら追ってくる。居合わせた人々は、イエンズがチュンから何か奪った泥棒なのかと思ひこむ。追跡を逃れようと車道に出たイエンズは結局トラックに轢かれてしまう。自殺によって母からの分離を試みようとしたイエンズは、母の化身に追い詰められ、服薬の計画を実行することなく亡くなるのである。彼女の最期を看取るチュンは「盗みにあった主人」(I, p. 147) のような顔をしている。その「絶望と非難」のまじりあった表情は母に似ているとイエンズは思う。通行人たちの反応が示唆していたように、彼女はある意味でやはり泥棒なのだ。彼女は彼女のものではない。彼女は母のものであり、チュンのものである。彼女が彼らから離れようとして死ぬことは、彼らが当然所有すべきものを彼らから盗むことなのである。

## 2. 食べること／食べられること

このように、母やチュンにとってイエンズは被食者であるが、彼女は捕食者になりたいという欲望を実は持っている。こうしたイエンズの欲望をまず肉食と菜食という観点から確認し、次に彼女の祖母やおじと比較することで母娘の価値観・欲望の相違を分析し、最後に母胎を表象する部屋に対するイエンズの両義的な感情から、彼女の欲望の矛盾を考察する。

### 2-1. 肉食と菜食

イエンズはチュンにとって獲物であり、所有物であった。彼女は彼が現れると、自分が「とても女性になってしまう、とても欲望をそそるものになってしまう」(I, p. 142) と感じる。一方で、

ビィとの関係ではあたかもイエンズの方が狩猟者のようであり、「何としても彼を手に入れたい」「爪で力いっぱい彼をつかみたい」という「じりじりする欲望」や「死にゆく者の渴き」を持っている (I, p. 80)。会社の同僚フアの婚約者であるビィを紹介されたイエンズは、その日から瀕死の肉食動物のような欲望を彼に抱くのだ。馴染みのレストランで彼に再会したイエンズは、いっしょに食事し、夜の公園を訪れる。そこは、恋人とふたりきりになれる部屋を持たない若者たちのたまり場である<sup>6</sup>。イエンズはビィとの身体的接触を望むが、自分から彼に触れることはできない。女性には軽率な行為は許されていないと母から教え込まれたためだ。そのかわりにイエンズの「精神が彼を吸い込」み、彼の体を夢想する (I, p. 88)。それに気づいたかのように、捕食者に狙われる獲物になったビィは息をひそめる。そして、ふたりが関係を持った翌日、イエンズはビィの「心を食べてしまった」 (I, p. 116) — 「心臓を食べてしまった」とも読める — とフアに責められることになる。

母との関係では被食者の側にあるイエンズだが、彼女はむしろ捕食者でありたいのだ。そもそも彼女は肉を食べるのが好きな人物として描かれている。母に気に入られるように「控え目に食べ」ようとしていたこともあるが (I, p. 20)、本当は食べるのが大好きなのだ。彼女の両親にチェンが朝鮮人参を贈ると、むしろ肉を贈ればよかったのにと考え、彼をもてなすために母が豚肉を買ってくると、食べるのが楽しみで客のことを忘れそうになるほどだ。ほとんど強迫観念のようだが、それには理由がある。母はイエンズに肉をあまり食べさせず、菜食で育てようとする<sup>7</sup>。肉の値段が高騰していたという事情もあるようだが、母は貧しい食生活によって厳しく育てる方が娘のためになると考えている。それは、家族の「将来を保証するために、そしてとりわけ試練によって [イエンズを] 鍛え上げるために」 (I, p. 99) 必要な節約なのだ。そのため、イエンズは母に給料をすべて渡しているのに好きなものを食べさせてもらえないという恨みを抱くようになる。両親と喧嘩して家を出た彼女が、自由に金を使えるようになったらと夢想する時に最初に考えるのも、肉や魚をもう少し多く食べられるようになるかもしれないということだ (I, p. 133)。節約を重視する母と食欲に正直な娘の対比は、彼女らの生き方の対比でもある。母は娘の給料をすべて持参金としてとっておき、娘によい結婚をさせ、娘が子を産み育てることで、自分の命が未来に繋がっていくことを目指す。つまり未来のために現在を、共同体のために個人を犠牲にする。一方で、親への贈物として朝鮮人参より肉の方がいいと考えるイエンズは、自分の幸せを今生きることを重視している。だからこそ彼女は後先考えずに男性と肉体関係を持つことを望む。それは母が計画する結婚の掛金である自らの身体を無価値にするためであるだけでなく、母が美

<sup>6</sup> ビィはフアと結婚するためにふたりの部屋を探しているのだが、そもそもビィは自分の部屋というものをまだ持ったことがない。また、ビィやイエンズが住む町には、「両親の居住空間を相続するために、その死を待ちわびている」若者たちがいるという (I, p. 49)。部屋は両親からの独立という問題を象徴している。

<sup>7</sup> この吝嗇で厳格な母親は『戸口の子ども *Un enfant à ma porte*』(2008)の母親とは対照的だ。後者は子どもに無理矢理たくさん食べさせようとする。



徳と考える節約や忍耐を否定し、未来よりも現在の快楽を、共同体よりも個人の幸せを選ぶという宣言なのである<sup>8</sup>。そうすると、イエンツがビィと再会した場が「解放街 rue de la Libération」の「幸福 Bonheur」という名のレストランであったということは示唆的だ。イエンツは共同体の義務から解放され、個人の現在の幸福を生きることを望むのである。

## 2-2. 祖母とパンおじさん

母の義母、つまりイエンツの父方の祖母もまた、ある意味で現在の幸福を生きることを象徴する人物である。イエンツが買ってきた月餅を食べる祖母の姿は、瞬間の快楽に没頭する者のそれである。イエンツは「おばあちゃんが目を快楽に震わせ、お菓子の噛みつくのを見た」(I, p. 65)。月餅は家族の「調和に満ちた結合」を象徴する。構成員が集団に寄与し、ひとつのものになることは、おそらく母が求める理想の家族像だろう——そのため、家族に対する圧制を母は正当化するのだが。この理想を祖母が「歯で割り、胃袋で粉々にし、体で吸収し、泥に変えてしまう」のを眺めるイエンツは、両親にも月餅をあげたと言う祖母に対し、自分のことだけ考えてと答え、共同体の「調和に満ちた結合」を否定する。

母と祖母は折り合いが悪いのだが、母が祖母を嫌う理由のひとつは祖母が美しかったからである。イエンツは子供の頃、祖母が長い髪を結うのを見たものだった。鏡の前で髪をとかす祖母は幸せそうに微笑んでいた。その様子が滅多に微笑まない女性である母には気に入らなかった。母によれば髪の長さとは知性は反比例する。鏡に映る身体的な美のような、うつろいやすい幸福に微笑み、時間をかけて長い髪を結び上げるような行為は愚かさの証だ。「無知は女性にとって美德である」と言われるが、無知は「私たち [女性] の眠りを、心の平穩を長引かせ」、祖母のように無邪気に微笑むことを可能にし、「したがって私たち [女性] の魅力を長続きさせる」(I, p. 14)。魅力的で美しいことと無知は同義である。このように母は祖母をバカにするが、だからといって彼女が知性を重視しているわけでもない。彼女は知識人である夫をも軽蔑している。書斎に閉じこもり、日々の生活に非協力的だからだ。母にとっては、日常の細々としたことを気にかけ、未来のために節約し、忍耐強く家を存続させていくような才能こそ重要である。髪のことなど気にしている暇はない。

ところで、祖母の幸せな時間はいつまでも続くものではない。老いて自分で髪を結うのが難しくなった彼女は、孫娘に手伝ってもらうようになり、しまいには髪を短く切ることを決断する。その日、祖母は自分の顔が部屋の錆びた鏡に似ていることに気づいた。老いという悲しい現実

<sup>8</sup> イエンツが死ぬ前に一度は肉体の快楽を味わいたいと考え——実際には期待したような快楽は得られないのだが——、男性と関係を持つのは対照的に、母は節約と忍耐によって未来を志向する性を体現する。母親というものは「胃袋を満たすために野菜だけ、あるいはほとんど野菜しか食べなくても、それでもお腹は大きく」なる (I, p. 140)。母は肉の快楽なしで受胎する。そして、またここでもイン・チェンの想像力は消化器官と生殖器官を重ねあわせている。

気づき、その分知性を獲得した祖母は、髪を切り、自分の現在の美や幸福と決別するのだ。しかし、彼女は自分のような生き方を孫に託そうとし、髪を伸ばすことを勧める。髪には人柄があらわれるのだから、母のような「見苦しい髪」(I, p. 40) はいけない。

髪型の選択は、イエンズが母のように個人の現在の幸福を否定して共同体の未来に希望を延期するのか、祖母のように長つづきしなくても自分の現在の楽しみを大事にするのかという選択なのだ。

母の教えに従って生きた場合のイエンズは、パンおじさん — 母の兄弟 — のような人生を送るかもしれない。おじさんは母と価値観を共有する。イエンズが友人と出かけ、誰といっしょなのか突き止めようとした母と口論になった時には、おじさんは母をかばい、「私 [=イエンズ] にすべてを与えた母さんを失望させるべきではない、母さんは母さんなりのやり方で私を愛しているのだし、いっしょに食事したかっただけなのだから」(I, p. 83) と主張した。

ビィとの一件の後、両親と争い、家を出ることになったイエンズは、「私はこの家族の癌」(I, p. 104) だと考えるようになるが、そこへ胃癌を患うパンおじさんが登場する。おじさんは自分が癌であることを知らされていない。母によれば、それはおじさん自身のため、おじさんが幸せに生きるために必要な嘘である。しかし、おじさんは病気のことを知らなくても、いつも何か心配ばかりしており、決して幸福そうではない。消化に問題があってあまり食事の喜びを感じることもできず、それなのに一粒でもご飯を残してはいけないと子供の頃に厳しく躾けられたため、吐き気がしても最後まで食べようとする。盲目的に親の教えに従うことはパンおじさんを苦しめるばかりなのだが、彼はそれに背くことなど考えようとしめない。共同体の掟を破って今自分が楽になる方がいいとは考えないのだ。もし癌という真実を知っていたら無理はいけないと考えることもできたかもしれないのだが。「窓に背を向けて」(I, p. 121) 座り、外の世界から目をそむけるパンおじさんは、親から教えられた以外の価値観を知らず、自分の真実に気づかない場合のイエンズの末路を暗示している。実際のイエンズは自分には親とは違う考えがあると主張し、親に反発し、自分が家の癌、異物であることを引き受けた。それは決して幸せではないだろうが、母の価値観を無理に飲みこもうとしても生の喜びは感じられないだろう。しかも、母は自分が真実と思うことを娘に飲みこませようとするばかりで、娘には娘の真実があるとは考えない。

[母さん] は、あらゆる彼女の真実を私にさらけ出すことを躊躇しなかった。母さんの意見によれば、私は彼女の娘なのだから、難なくそれらを消化できるはずだった。しかし、母さんは私の真実を受け入れなかった。私には私の真実があるということを信じようとしなかった。もしまったく不幸なことに、そんな真実があったら、母さんは全力でそれを抹消しようとしただろう。(I, p. 57)

娘には娘の真実や考えがあるということこそ、母にとっては娘を「家族の癌」たらしめる原因

だろう。しかし、娘は味気ない母の真実を消化するよりは、リスクを冒しても自分の真実を選び、それを咀嚼することを望むだろう。そしてイエンズは家を出て行き、かわりに彼女の部屋には、母に最期を看取られるため、母に依存して生活せざるを得ないパンおじさんが住むことになる——自分の病気を知らないおじさん自身は、そこが終の棲家になるだろうということにも気づかないのだが。

### 2-3. 部屋

イエンズが去って行こうとしている部屋は母胎の象徴である。パンおじさんがそこに住むことになり、イエンズは、自分の歳月を「飲みこんだ」部屋が今度はほかの者の人生を「吸収する」のだと考える (*I*, p. 124)。ところで彼女は、おじさんが来る前日、つまり両親と喧嘩した晩からすでに、部屋を離れることを考え、悲しんでいた。

しかし、部屋のことを考えると、大きな不安で下腹部がチクチクと痛んだ。私は路上で死にたくはなかった。私は両親から離れたかったが、その家の快適さからは離れたくなかった。  
(*I*, p. 102)

「下腹部」が痛むのは、イエンズの想像力のなかでは部屋が子宮と結びついているからだ。一方で、部屋は胃袋でもある。

この部屋はこんなに長いあいだ私を所有したあとで、私を吐き出そうとしていた。私はうまく消化されず、そのあらゆる気まぐれのなすがままに、その胃に保存されていたのだ。( *I*, p. 102)

娘を食べてしまおうとする母の胃袋と子宮が重ねあわせられ、帝王切開の傷痕が脅迫的な口に見えたように、部屋もまた胃袋と子宮を兼ねる器官として表象される。胃袋に飲みこみ、子宮に閉じ込めたままにしておくことによって、娘を自分の思うままに支配したいと考える母の存在は、それらの器官そのものに還元され、さらに、母を表象する器官を部屋が表象することにより、イエンズの部屋は母の胃袋-子宮そのものとなる。

母から離れたいと願うイエンズだが、冷たい秋風が吹く晩には部屋のぬくもりを失うことが惜しくなる。彼女は「こんな季節に母さんから離れるよりは、母さんのお腹のなかで死ぬほうがいい」(*I*, p. 103)とまで考える。部屋を出ることは母胎から出ることにほかならない。イエンズが部屋のぬくもりに包まれたままにいたいと願うのは、広い世界へ生まれ出ることを恐れるからである。母の束縛を逃れたいが、自由を手にしたら何をしてよいのか自分で決断できないのだ。彼女は、母に給料を渡すのをやめて自由に金を使えるようになったら、もっと肉や魚を食べられる

かもしれないと夢想したが、実はそのくらいしか金の使い道を思いつかない。彼女は両親の家を出て手にする自由をうまく行使できないかもしれない。母の圧制から逃れたいと思う一方で、いつまでも母に守られていたいという両義的な感情を持っているのだ。そのことは、母の前でイエンズがよく行う「後ずさり」という身振りにも表れている。「ずっと前から、母さんの前での私の最も自然な身振り」(I, p. 96)である後ずさりは、娘の母に対する恐れを表していると同時に、娘が母胎から出るのに抵抗したことを思い出させる。難産の末、母は帝王切開を余儀なくされた。最初からイエンズは、母から離れて外の世界へ出ることに恐れを感じていたのだ。

不自由と引き換えに外の危険から守ってくれる安全な牢獄である母胎を去りがたく思うイエンズは、自由を恐れる囚人のようである<sup>9</sup>。あるいは外界を恐れる籠の鳥のようである。

イエンズの母は彼女を産む以前に鳥を飼っていた。鳥は常に籠に閉じ込められ、鳴きすぎると罰せられた。鳥では「母性の高揚」(I, p. 58)を満足させられなくなると、母は娘を産み、ツバメ——燕子 Yan-Zi ——と名付けたのである。この名は、一義的にはもちろん娘を籠の鳥のように支配したいという欲望のあらわれであるが、娘が渡りの欲望を持つ者であることを暗に認めているかのようでもある。娘が自分の複製であることを願う母は、娘を通して自分も鳥のように飛び立つことを——おそらく無意識に——願っていたということではないのか。娘が母に対して恐れと執着という矛盾する感情を抱いていたように、母もまた、娘に飛翔の希望を託しつつ抑圧するという二重拘束的な態度を取っていたのではないのか。パンおじさんに部屋を譲るにあたって、母は娘を巣立つ鳥に喩えている (I, p. 123)。娘の翼を押さえつけながらも、彼女がいつかは飛び立っていくものであることをわかっていたのだ。

### 3. 再生に向かって

イエンズの母に対する曖昧な思いは死後も彼女を引き裂き続ける。彼女は自分の死(体)を復讐として母に味わわせたいと考えるが、その目論みが外れるのを見ることになるだろう。しかし、彼女の失敗は肉体性と精神性をめぐる両親との関係性のうちにあらかじめ準備されていたのだ。それでも失敗を超え、母の複製であることを拒否しつつ、イエンズは再生を果たすだろう。

<sup>9</sup> 『中国人の手紙 *Lettres chinoises*』では、モンリオールに移住したユアンを、上海に残った恋人サアサが、「牢獄から逃げるために壁に穴を開ける手段を見つけたのに、その壁が取り除かれると迷子になったと感じる愚か者」と形容する (Ying, 1998, p. 136)。サアサなしで生きていくことに恐れを感じ、ひとりで飛び立とうとせず、安全な不自由を求めるユアン——彼は鳥や風にも喩えられる——をサアサは愚かだとなじるのである。また、イエンズが母に反抗して身をゆだねる相手——自分と婚約者の部屋を探す青年——の名が「壁 Bi」であるということも示唆的だ(名の漢字表記は作者自身による中国語翻訳版参照)。彼はイエンズが外の世界に出ようとしてぶち当たる壁である。壁を突破しようとしたイエンズは、かえって自らの身体に傷をつけることになる。ビィによる破瓜は彼女が親の家を出る契機になったが、一方で、彼女の反抗が失敗に終わること、壁に当たって砕けるのはイエンズの方であることを暗示している。

### 3-1. 死体の効果

部屋が自分を「吐き出そう」としていると感じるイェンツは、自殺後には今度は人々の噂話の餌食になるのではと恐れ、「意地の悪い舌が私に飛びかかり、私を舐め、私を汚そうと待ち構えている」(I, p. 102) と考える。彼女は結局睡眠薬で自殺することはできず、トラックに轢かれて亡くなるが、その死は本当に単なる事故だったのかという人々の疑いを招くことになる。そして、単に彼女の死の話題が消費されるだけでなく、その肉体も火葬場に集う人々に供される。本来なら肉食であるはずの葬儀の食事は、今やたっぶり肉を食べる機会になっている。用意されたさまざまな種類の肉は死んだ娘の身体を表象する。客たちはイェンツを食べるのだ。彼女は自分の遺体が火葬されるまさにその時に、焼けた牛肉の匂いを感じ、母が娘について「本当に牛みたいだった」と言うのを聞く (I, p. 70)<sup>10</sup>。また、イェンツのいとは鳥を食べながら眉をひそめ、目を閉じる。「おそらく彼女はやせこけた [イェンツ] の顔を思い出」したのだ (I, p. 71)。

突然私は母さんの招待客たちに食べられているというバカげた印象を抱いた。人々が私の死を弔いに來た本当の理由が今ならもっとよくわかると思う。彼らは肉が大好きなのだ。(I, p. 70)

ここで肉を指すのに使われている語は専ら食肉を指す viande ではなく、人間の肉体ともとれる chair である。火葬場に隣接するレストランでの食事はカニバリズムの饗宴にほかならない。マリアンによれば、この食人のイメージは魯迅の「狂人日記」を参照させる (Ng, 2006, p. 158)。「狂人日記」は、食人妄想に取りつかれたため家に幽閉される男の日記という体裁の小説であるが、「善い人」であるためには「父さん母さんが病気になったら、息子たるものは自分の肉を一切れ切り落とし、これをよく煮て食べさせなくてはならない」(魯迅, 2009, pp. 289-290) とあるように、食人行為が儒教思想の実践と結びつけられている。イン・チェンはインタビューやエッセーで度々魯迅に言及しているが、こうした儒教思想に対する批判的視点を共有している<sup>11</sup>。

葬儀の会食がカニバリズムの場となることで、抑圧的な親の犠牲者としての娘というイメージが強調される。さらに、彼女の反抗に理解を示さなかった親族や知人たちにまで貪り食われることで、イェンツは単なる家族間の衝突によって死んだ者としてではなく、伝統的価値観に与する者たちによって支えられる社会の犠牲者として表象される<sup>12</sup>。

<sup>10</sup> フランス語で「牛のような人」は頑健な人、愚直な人を指すが、中国語では「牛のような性格、気質」は頑固や傲慢を表す。母は後者のつもりで娘を牛のようだと言っているのだろう。

<sup>11</sup> だからといって『恩知らず』は中国の母娘を書くことが目的なのではない。イン・チェンは「このような母親はここ [=カナダ] にもいる」と指摘し、小説の主題が普遍的なものであることを主張している (Lachance, 1995, p. 90)。

<sup>12</sup> カニバリズムは、人が他人の死を娯楽として消費/消化するものであることも示す。19章でイェンツがピエーたちとレストランで過ごしていると外で交通事故が起こる。好奇心の強い客たちは「血まみれの情景」を期待し、「テーブルに食欲をそそる話を提供し」、それを「ちびちびかじって」過ごそうとする (I, p. 79)。この事故はイェンツのそれを予告している。

一方で、娘は自分の死を復讐として積極的に母に味わわせようとしていた。自殺の衝撃で母を打ちのめしてやろうと計画していたイェンツは、その効果をさらに高めるために遺書を用意しようとする。死ぬのは母のため、母を愛するがゆえ、その厳しさに苦しんで死を選んだのだと書けば、望み通りの効果が得られるだろう。

ことばや表現を念入りに選ぼう。甘すぎても苦すぎてもいけない。涙を少しこぼせば、紙の味を引き立てるのに役立つだろう。でも、それを供する前には冷まさなければいけない…。(I, p. 17)

娘の遺書は一種の料理である。「甘い *sucré*」「苦い *amer*」という語、「味 *goût*」への言及、そして「供する *servir*」という動詞の選択によって、手紙は娘が母に食べさせるべき料理となる。しかし、それは娘を食べてしまいたい母の欲望を満たすためのものではない。娘が期待するのは、自分の死によって母の「胃が絞めつけられる」ようになり (I, p. 12)、「血を吐く」ことだ (I, p. 16)。娘は毒を食わせるように自らの死を母に飲みこませたかった。自らの身体を進んで親に差し出すのが子の努めであるのなら、それを逆手に取り、「とてもやさしい (*douce*) 手紙」 (I, p. 16) — あるいは「甘い *douce*」ことばをちりばめた手紙 — を添えて、処女を捨て価値を失った死体を差し出せば、母に対する効果的な復讐になるだろう。

しかし、イェンツの死の効果は、自殺ではなく事故死になってしまったせいもあり、彼女の期待とは大きく異なった。葬儀に集う人々は彼女を前にして肉の享楽に耽った。本来は菜食である会食に肉をふんだんに出そうと決めたのは母である。火葬と食事の後、家に移動した人々は母の出す甘いお茶を飲む。それは消化を助けるだけでなく、「墓地の記憶を追い払い、生の味 (*goût*) を取り戻させるため」のものだ (I, p. 74)。母の胃を焼くのは、娘の死がもたらす苦痛ではなく、彼女をしっかりと生の世界につなぎとめておくための、この熱く甘いお茶である。「胃が絞めつけられる」ような苦痛も「血を吐く」苦悶もなく — 少なくともイェンツが見る限りでは — 母が毅然とした姿勢を崩すことはない。イェンツの遺骨を埋葬する日、母は「この世で最も荘厳な足取りで」 (I, p. 126) 進む。参列者たちが骨壺に向かってお辞儀し、死者を前にして「後ずさりし」、「へりくだる *se rabaisser* = 自分を下げる」という謙讓の身振りをするのとは対照的だ (I, p. 127)。母は「英雄的な足取り」 (I, p. 152) を失うことはないだろう。

参列者たちが去り、ひとり墓地に残った母は娘に語りかける。

おまえはこの方がいい、と [母] はごく小さな声で話し始める。そう、灰になったおまえの方が好きだ。この方がおまえはとてもおとなしくて (*douce*) とてもかわいい、棘も角もない。(…) おまえは死んで母さんを動転させようとしたのだろう、かわいそうなバカな子、おまえにも一理あるかもしれない、でも、おまえの沈黙だけで、今私の気持ちを落ち着かせ、

おまえが私を突き落とそうとした混乱から私を救うのに十分なんだよ。(I, pp. 127-128)

イエンズの死は母にとって苦いものではなく、むしろ甘い (douce)。親への恭順を拒否して死んだ娘は、もう反抗的な口を利くこともないという点において、母の目にはこの上なく従順なかわいい娘に変貌する。イエンズの死は復讐の効果を持たなかった。彼女は望みどおりの打撃を母に与えることなく、「もう引き返せない Tu ne pourras plus revenir sur tes pas」(I, p. 129) ところまで行ってしまった。肉体を失った娘は、自分の足でしっかり立ち、歩み (pas) を進めることはもうできない。姿勢をめぐる母娘の戦いは、娘の敗北に終わったように見える。母は娘の死に打ちめされることなく、「英雄的な足取り」で歩み続けるが、肉体を失った娘が母に対して優位な姿勢を取ることはもう不可能だ。

墓地を出る時、手に灰がついているのに気づき、母はそれを念入りに払い落とす。母が揺らぐことはなく、娘はあっさり路上に捨てられる。

### 3-2. 肉体性と精神性

死んだ娘の精神は肉体を離れ、抜け殻となった肉体は茶甕に付されて灰になる。今や娘は精神だけの世界、死者の世界にいる。だが、彼女は生前肉体性——現在の快樂——を志向する一方で、実はすでに精神だけの存在に近づいていたのだ。両親との関係性が、娘を生きながらにして死者のような状態に追いやってしまっていたのだ。

すでに見たように、母は娘の肉体を、結婚に役立つもの、交換価値を有するものである限りにおいて尊重した。それは、家族の持続に役立つ肉体であり、その役割を果たすことにおいて母の価値観に従い、母の生き方をなぞり、母を複製するべき肉体だ。イエンズは母の望むこうした肉体に存在を還元されることを拒否した。そして彼女は母が守ろうとした処女としての肉体を破壊するためにビィと関係を結んだ。また、彼女の肉食的傾向は、イエンズが将来のために肉体を節約するよりも現在の快樂を選ぼうとする者であること、未来のために節約する母と対立する者であることのあらわれであった。

一方で、イエンズは父と同じく知識人として扱われるという点においても母と対立する。レストランの女主人は手紙を書こうとするイエンズに対し、「知識人のじゃまはしない」と言う (I, p. 18)。父は元大学教授であり、精神性を表象する。政治的なトラブルによって退職を余儀なくされてからは、父はいつも書斎にこもりきりである。母は家庭生活を無視するようなその態度が気に入らず、日曜にいっしょに市場に行ってくれないことに不満である<sup>13</sup>。食べ物つまり肉体性に

<sup>13</sup> 娘は、父がもっと母の相手をしてくれれば、母がこれほど自分に執着しなかったのではないかと考えている (I, p. 30)。つまり母娘関係の不幸の原因が父にもあることを彼女は見抜いている (Saint-Martin, 2001, pp. 72-74 参照)。

結びついた市場は、父の領域ではない。父は「彼が肉体的なものと呼ぶ、こうしたあらゆるくだらないもの」(I, p. 90)を軽蔑している。書齋にお茶を運ぶ時、娘は父のじゃまをしないように「体を小さく」しなければいけない気持ちになる(I, p. 29)。父の前では肉体性は消されなければならないのだ。父もまた、人に肉体性を見せるのを恐れるかのように、娘が部屋にいる間はお茶を飲まない。「墓のように」(I, p. 28)静まり返った書齋にこもる彼は、生きながらにしてすでに肉体を失った死者のようである。

母は父と娘が似ていると言う。父のように本を読み、考え込む傾向のある娘は、毎週母と市場に行くことを耐え難く思い、いずれは「父と同じくらい無感覚な精神」を持つようになるだろう。

埃まみれの紙のなか、生の裏側で、自分が父さんとふたりきりでいるのが見えた。生のまんなかにありながら、自分がもう死んでいるのが見えた。(I, p. 37)<sup>14</sup>

肉体性の場としての市場に象徴される現実生活を重視する母にとって、思弁的世界に生きる者たちは生者でありながらすでに死者であるような存在である。母は、共同体の未来の幸福よりも個人の現在の快樂を優先するような肉体性を断罪するが、かといって知的生活に閉じこもる父のような精神性も嫌悪する<sup>15</sup>。そしてイエンズは、その知性や内省的傾向によって父に似るが、父ほど論理を操るのがうまいわけでもなく、精神性だけで満足することもできない。彼女は肉体性をも求めるが、彼女の望む個人の現在の快樂は、母の願う幸福、共同体の未来に先送りされる、あらかじめ方向づけられた幸福とも異なる。「父の額と母の頬」(I, p. 20)を持つイエンズは、精神は父に肉体は母におそらくは似ていたのだろうが、どちらともずれを抱えており、結局どちらにも似なくなる。

知識人である父を軽蔑する一方で祖母を無知な女性として見下していた母、娘に肉を禁じながら娘との食事を何よりも重視していた母は、頭を使いすぎず楽しみすぎない禁欲的な精神性と肉体性を娘に要求する。母によれば、娘が死んだのは彼女が本を読みすぎたからである(I, p. 128)。イエンズは母に反発し、解放された肉体性を求め、個人の現在を生きようとしたが、それによって母から自分を解放することはできなかった。むしろ、母から離れることを考えるあまり、母の複製になるべく運命づけられた自らの肉体を拒否せざるを得なくなり、肉体が無効化された精神だけの存在に変化していく。つまり死へ向かうことになる。墓場のような静けさに満ちた父の書齋が暗示していたように、精神つまり esprit は死者の霊でもある。

<sup>14</sup> イェンズが強く惹かれ、関係を持つことになったビィも知性や死のイメージと結びついている(I, p. 76)。

<sup>15</sup> 実際は父もまた肉体性——それも低劣な肉体性——を持っていたことが、イェンズの葬儀で明らかになる。父が会食の席で酔っ払い、顔を真っ赤にして親戚の女性にからむのを娘は見ってしまう(I, p. 72)。カニバリズムの饗宴は、人間の獣性が暴かれる契機になる。



### 3-3. 複製から再生へ

家を出たイエンズは死ぬ場所を探して馴染みのレストランに行く<sup>16</sup>。そこで彼女はチュンに遭遇し、彼から逃げようと外へ出るわけだが、その時、店の女主人が電話で彼女のことを話しているのが聞こえる。警察あるいは精神病院へ通報しようとしているのではないかと、それとも母に連絡しようとしているのではないかとイエンズは恐れる。彼女は病院へ連れて行かれ、胃洗浄が行われるかもしれない、あるいは腹のなかを調べる手術が行われるかもしれないと考える。胃洗浄で腹のなかを「空にされる」にせよ、腹のなかの「清らかさ」を調べられるにせよ (I, p. 144), 母は病院でのそうした行為を許可するだろう。イエンズの腹は母の同意しないものを詰め込んではいけないのだ。彼女が母の真実以外を飲みこんではいけなかったように。イエンズの腹に醜い手術跡が残ったとしても問題ない。むしろ母にとってそれは、帝王切開の跡を持つ自分と娘が似るための喜ばしい印となる。なにしろ娘は母の「複製」であるべきなのだから。そして自殺から娘を救った母は、娘に再び命を与えた者として、娘に対する支配力をいっそう強めることになるだろう。

もちろんイエンズはこのような結末は望まない。だからこそ、母の化身であるチュンから必死に逃げ、その結果トラックに轢かれたのだ。この死は本当に事故なのかと人々は疑うことになるが、車道に出ることで死を招いた一種の自殺にも見える。

歩道の端にとどまったチュンが「バカ！」と怒鳴ったことを思い出す。あるいは「バカども！」だったかもしれない。私の腰の上を走っていく車の運転手のことを言っていたのか、それとも肉体が、その肉体としての特質を失おうとしている私のことを言っていたのかわからない。(I, p. 148)

力尽きて這うように車道に出たイエンズは腰部を轢かれ、腹を潰される。母に腹を調べられること、母に似ること、母の複製になることを恐れていた娘は、腹を破壊されることによって複製から解放される。胃も子宮も潰された娘は、もう何も腹に飲み込むことはできないが、母をくりかえすこと、母になることを拒否できる。複製のための器官は破壊され、母が守ろうとしていた結婚のための財としての娘の身体は否定され、その特質を失う。

その後イエンズの霊は、煉獄のようなところ、「中間的な neutre」場、「色も匂いも味も形も重さも熱もない」(I, p. 149) 場を漂うことになる。その不毛な光景は、彼女が死後に期待していた世界とは異なるようだ。母から逃れ、何にも属さない状態になったイエンズは、「いたるところにいと同時にどこにもいることができない」(I, p. 150) で彷徨いつづけることを余儀なくされる。

<sup>16</sup> 客の食い逃げを用心するような女主人の目がイエンズを居心地悪くさせる (I, p. 130)。母やチュンにとってイエンズは、彼らの所有すべきものを掠め取る泥棒として表象されたが、彼らの側に立つ者にとって、彼女は恩を返さない者あるいは対価を支払わないで逃げてしまう者と見なされる。

「母の子供」を殺すことによって「私が何ものでもなくなる時、私は私になるだろう」(I, p. 23)と考えていたイエンズは、母——出自 (origine) やルーツ (racines) —— なしでは存在できないことにやっと気づく。しかし、彷徨いつづける彼女の霊は、生前の記憶が遠いものになっていくなかで、やがて何にも属さないことの幸福を味わう境地に至る。その幸福を感じることはできるのは、一度は何かに属すことの苦しみを知ったおかげである。母を持ったことがなければ、母から離れることのありがたさを感じることもない。「だから、ある女の子供であるということは、そうではない幸福を知ることができるチャンスなのだ。そのチャンスのおかげで、大いに恩を感じることはできるのだ」(I, p. 154)。

母を持ったことをもう苦しむ必要はない。この一種の感情の和解の後、イエンズはすべての記憶を失わせる光を経て転生する。母の複製であること、複製のための性であることを拒否したイエンズは、複製になること／複製することのかわりに、死んで自分を再生させる。彼女が最後に聞くのは乳呑み児<sup>17</sup>が「母さん！」と呼ぼうとする声、おそらくは転生した彼女が最初に発する声である。「ある女の子供」であることをやめることはできなくても、再生を試みることは可能なのだ。

## 結論

『恩知らず』において、主人公の欲望や存在の様態は、さまざまな食のイメージによって表象される。娘と母や恋人たちとの関係は食べる／食べられる行為によって語られ、自分の生や死を模索する彼女の挑戦もまた、食の欲望に結びつけられている。彼女は自分を食べ、腹に押し込めておこうとする母、娘を小さな存在にとどめておこうとする母に反抗し、肉食に象徴される自分の快樂や幸福を求め、母から離れて生きていくことはできず、かといって自立をあきらめることもできず、死に解決を求めしかなくなってしまう。

確かに小説の結末は悲劇的だ。イエンズの反抗は読者にカタルシスを与えるようなものではない。マリア・ンが批判的に指摘するように、家を出て母から離れて生きていくよりは母の側で死のうとする主人公は、機能不全を起こした共同体から自立した生き方を選べなかったという点において、結局伝統的価値観から自分を解放することはできなかったのだと考えることもできる (Ng, 2006, p. 159)。しかし、イエンズは死ぬことによって、距離を置いて自分と母を見ることが可能になった。人が母なしでは存在できないということを冷静に見つめるのである。そして最後には自分の記憶からも遠ざかることで再生が可能になる。悲劇的な死を通してではあるが、イエンズは新しい生に向かうことができたのだ。

姿勢をめぐる戦いにおいて母に敗北したイエンズ、母を前にするとつい後ずさりしてしまう娘

<sup>17</sup> 小説の最後に「赤ん坊 bébé」ではなく、「乳呑み児 nourrisson」という語が用いられていることは興味深い。「食べ物 nourriture」や「食べ物を与える／食べる(se) nourrir」ことのイメージが特権化されている小説の末尾にふさわしい選択である。

だったイエンズにとって、死とは究極の後ずさりだったのかもしれない。かつては恐れの実現であったその身ぶりは、距離を置くことを可能にした。あるインタビューでイン・チェンは、離れたところから身近な人々を見る『恩知らず』の主人公と、作家としてのあり方の類似を問われ、「書くことは自分から離れることです。一步退くことが重要です。書くことは自分から距離を置くことなのです」と答えている (Stillman, 2009, p. 37)。距離を置くことで、自分について、自分の根について語る事が可能になる。死という後ずさりによって、イエンズは再生を可能にするモノログを獲得したのである。

### 参考文献

- Abubakari, Salimat (2011) *La quête identitaire dans l'œuvre de Ying Chen*, Saarbrücken, Éditions universitaires européennes.
- Bernier, Sylvie (1999) « Ying Chen : s'exiler de soi », *Francofonie : studi e ricerche sulle letterature di lingua francese*, n° 37.
- 魯迅 (2009) 「狂人日記」『故郷／阿 Q 正伝』藤井省三訳, 光文社古典新訳文庫。
- Lachance, Micheline (1995) « Des vies à l'encre de Chine », *L'actualité*, 20.18 (15 novembre 1995).
- Lapointe, Martine-Emmanuelle (2004) « "Le mort n'est jamais mort" : emprise des origines et conceptions de la mémoire dans l'œuvre de Ying Chen », *Voix et Images*, vol. 29, n° 2 (86).
- Lequin, Lucie (2001) « The Legacy of Words: Mothers as Agents of Cultural Subterfuge and Subversion », *Doing Gender: Franco-Canadian Women Writers of the 1990s*, Paula Ruth Gilbert and Roseanne Dufault (dir), Madison & London, Fairleigh Dickinson University Press.
- Ng, Maria (2006) « Abusive Mothers: Literary Representations of the Mother Figure in Three Ethnic Chinese Writers: Hsieh Ping-ying, Denise Chong, and Chen Ying », *Asian Women: Interconnections*, Tineke Hellwig and Sunera Thobani (dir), Toronto, Women's Press.
- Oore, Irène (2003) « Être ou ne pas être : le suicide dans *L'Ingratitude* de Ying Chen, dans *Unless* d'Hélène Monette et dans *L'île de la Merci* d'Élise Turcotte », *Dalhousie French Studies*, vol. 64.
- Petkov, Yavor (2013) « *L'Ingratitude* de Ying Chen : un roman néo-existentialiste? », *Asian Journal of Canadian Studies*, vol. 19, n° 2.
- Porret, Véronique (2007) « La féminité est-elle subversive ? D'une psychanalyste française à une psychanalyste chinoise », *Lacan et le monde chinois*, [http://www.lacanchine.com/Ch\\_Coll\\_C07\\_Porret\\_files/Porret%20V-Feminite%20subversive.pdf](http://www.lacanchine.com/Ch_Coll_C07_Porret_files/Porret%20V-Feminite%20subversive.pdf)
- Rodgers, Julie (2016) « Ying Chen: Experiment and Innovation », *Ten Canadian Writers in Context*, Marie Carrière, Curtis Gillespie and Jason Purcell (dir), The University of Alberta Press.
- Saint-Martin, Lori (2001) « Infanticide, Suicide, Matricide, and Mother-Daughter Love: Suzanne Jacob's *L'Obéissance* and Ying Chen's *L'Ingratitude* », *Canadian Literature*, n° 169.
- Schöch, Christof (2013) « Ying Chen, ou : dialogues au-delà des frontières. Une lecture de *L'Ingratitude* et de *Querelle d'un squelette avec son double* », *Dialogues transculturels dans les Amériques*, Anne Brüske et Herle-Christin Jessen (dir), Tübingen, Narr.
- 真田桂子 (2006) 『トランスカルチュラルリズムと移動文学』彩流社。
- Stillman, Dinah Assouline (2009) « An Interview with Ying Chen », *World Literature Today*, March-April, University of Oklahoma.
- Yang Wen (2015) *Incarnation et réincarnation chez Ying Chen*, Paris, Éditions Publibook.
- Ying Chen (1995) *L'Ingratitude*, Montréal, Leméac / Arles, Actes Sud. Rééd., id, coll. « Babel », 1999.

- (1998) *Lettres chinoises*, nouvelle version, Montréal, Leméac / Arles, Actes Sud, coll. « Babel ».
- (2004) *Quatre mille marches*, Paris, Seuil.